P-341

患者図書室「はなみずき」の開設と取り組み

徳島赤十字病院　事務部　医療情報課　広報学術係

○大岸真壽美（おおぎし　ますみ）

【目的】患者のヘルスリテラシーの向上は、医療提供者と患者による「協働の医療」を推進し、医療の質と効率の向上を図ることになる。徳島赤十字病院では、患者や家族が病気のことや検査について詳しく知りたいという要望に応えるため、また医師からの説明を理解し、自分で治療の選択をするための知識を得ることへの支援を目的として、患者図書を設立したので、導入までの経過と現状、今後の取り組み等を報告する。
【経緯】2003年9月に職員図書室を患者へ開放する活動を開始した。2006年5月の病院新築移転に伴い、玄関近くの「地域交流スペース」内に患者用図書閲覧コーナーを設置し職員図書室から分離したが、書籍は職員などからの寄贈に頼ったものであり、数的にも内容的にも満足できるものではなかった。また、常駐の管理者がいないための図書紛失等、態勢についても充分とはいえなかった。そこで、NPO医療の質に関する研究会の患者図書室プロジェクトの全国公募に応募、寄付対象施設に選定され、患者向けの図書などの寄贈を受けて2010年7月「患者図書室はなみずき」としてリニューアルオープンした。
【現状と取り組み】利用者は一日平均約40名。ボランティアスタッフによる常駐管理、入院患者への図書貸し出し、継続的な広報、病状に応じて医師が推薦図書を患者に紹介する「本の処方せん」の発行、医療相談支援センターとの連携など、様々な取り組みをしている。また、利用者アンケート調査を実施し、地域で唯一の医療専門図書室であり大変重宝しているとの評価を戴いている。今後さらなる利用者拡大とサービス向上を図っていく。

P-342

こどもとその家族を対象にした模擬国際救援ワークショップの取り組み

京都第一赤十字病院　医療社会事業部

○佐野友妃子（さの　ゆきこ）

【はじめに】京都府赤十字血液センターでは、小学生4年生～6年生とそのご家族、約20組を対象に献血の啓発を目的に夏休みに『こどもレッドクロス隊』というイベントを開催してきた。昨年度、同府の病院より国際救援に参加した職員が出たこともあり、その広報を行なったところ、血液センターの意見箱には、赤十字の国際救援について知りたいという要望や、また、東日本大震災を受けて、自分たちには何ができるかといった悩みをもつ市民の声が寄せられた。そして、今回、参加者への赤十字事業の紹介、そして、赤十字の基本原則の普及を目的に、同企画を新たなテーマの1つとして追加し開催することとなった。
【目的】自分自身を守ること、他人を守りたい時にどうしたらいいのか、赤十字事業の紹介（国際（国内）救援活動・ボランティア活動等）、赤十字理念の普及（人道・世界性・奉仕を中心に）を通して、赤十字への理解と、参加者への災害などに対する個人としての関わり方を考える機会の場とする。
【方法】国際救援の要員が実際に訓練で行なっている内容を元に、こどものみならずご家族も巻き込む参加型形式。
【内容】「無線交信　連絡をとることの大切さ」「世界を取り巻く環境　知らない事がたくさん起きている」「危機管理　自分の身に危険が起きたときどうしたらいいのか」「今、日本や世界の人たちがはじめていること」「普段からできることを考えよう」
【まとめ】人を助ける多様な職種の人材を有し、様々な事業を行なっている赤十字が、市民のニーズに合ったタイムリーな啓発活動が行なえる事、また、人材・事業からみてもその活動の企画内容の幅が広いことを再認識し、今後のイベント企画に向けての気づきとなった。参加者によるアンケート結果、また、スタッフ自身による評価を報告する。

P-343

一般ボランティアに対する災害時こころのケア講習会を経験して

諏訪赤十字病院　脳神経外科[1)]、長野県日赤ボランティア[2)]、日本赤十字社　長野県支部[3)]

○上條　幸弘（かみじょう　ゆきひろ）[1)]、塩澤己寿枝[1)]、油井　光[2)]、内村　辰徳[3)]

【背景】日本赤十字社長野県支部は災害時のこころのケア研修会を救護員と日赤ボランティアを対象に行ってきた。今回、長野県社会福祉協議会が主催する「第35回信州発ボランティア・地域活動フォーラム」の分科会で、一般ボランティアに対する災害時のこころのケア講習会を開催した。
【目的】一般市民への災害時こころのケア講習会のカリキュラムを作成する。
【方法】災害講習会のアンケート結果を検討した。参加者22名は2/3が災害の知識があまりない一般市民、1/3が災害の知識がある参加者だった。時間は2時間30分で、講演、クロスロード、グループワークを実施した。講演はボランティアの歴史や災害医療概論と、日本赤十字社が実施しているボランティアのためのこころのケアの講義を参考にした。クロスロードは、少人数グループで災害支援時のジレンマを伴う場面について各人が「Yes」「No」を選択し、その理由について話し合うものである。グループワークは災害時のこころのケアに関連するテーマを話し合い、その結果を発表し議論を深めた。それぞれの項目に対し、1. 参考にならない、～5. 大変参考になった、の5段階に点数化した。また、自由記載での意見も求めた。
【結果】21名からアンケートを回収した。講演の平均点4.05点、クロスロード4点、グループワーク3.76点だった。自由記載では、災害前の勉強会は意味がある、皆で話し合えてよかった、など好意的な意見が多かったが、よくわからないなどの意見もあった。時間配分も指摘された。
【考察】参加者は災害に対する知識に差があるため、各自の事前情報などからグループ分けを行う必要がある。講習会に好意的な意見が多く、一般市民もこころのケアに興味があり、講習会を積極的に開催していきたい。

P-344

がん相談支援センターの取り組み
がんサロン「やすらぎの会」について

富山赤十字病院　看護部

○多賀　明子（たが　あきこ）、駒見　恵子

【はじめに】当院では2009年4月がん相談支援センターが開設され、2010年5月に富山県がん診療地域連携拠点病院の指定を受けている。主な活動内容は、がん患者、家族並びに地域住民に対して、電話・面談によるがん相談をはじめ、教育および啓蒙活動としての「がん征圧月間」や「乳がんの早期発見強化月間」、がんサロン「がん体験者と家族の会　やすらぎの会」（以下やすらぎの会）を企画・運営している。今回がん相談支援センターにおける取り組みの中で、やすらぎの会の立ち上げから現在に至るまでの経過および今後の課題について検討したので報告する。
【経過】2009年7月より健康教室「がんについて」を年間6回開催し参加者は59名であった。2010年は10月までに7回開催し参加者は60名であった。毎回参加者に記述式アンケートを行った。参加者からの感想では、講義内容に対する満足度が高く、今後希望する内容では、こころのケアや同病者の体験を聞きたい等が挙げられた。健康教室開催後の振り返りより参加者間の関係性が深まってきていることを相談員として感じていた。そこで、がん体験者と家族が交流できる場の提供も同時に行う必要性を考え2010年11月から、がんサロン形式でのやすらぎの会を企画し3回開催した。2011年度は11回の開催で、交流会の中でミニレクチャーを行う形式とし現在に至っている。参加者の感想として、「いろんな人の話を聞いて、悩んでいるのは自分だけじゃないことがわかった。」など良い反応が得られている。しかしその一方で「この会があることをもっと早く知りたかった」という声も聞かれている。
【今後の課題】院内・院外に向けて広報活動は行っているが、さらに外来・病棟とも連携し、院内職員が、やすらぎの会についてがん体験者やその家族に説明できるように啓蒙していく。